

語の構造と名付けの機能の関係について

—「形容詞＋名詞」形と「形容名詞(形容動詞)＋名詞」形の複合語の場合—

島村 礼子

1 はじめに

語 (word) と句 (phrase) の違いの一つとして、従来から語は名付け (naming) の働きをするのに対して、句は陳述 (description) の働きをされると言われてきた (Bauer (2003: 135), Olsen (2000: 898-899), Downing (1977) 等)。例えば Bauer (2003) は以下のように述べている。

派生語と同様、複合語はモノ (entities), 性質あるいは行為に対する名前 (name) である。それに対して、統語の機能は陳述 (description) である。judo-ist のような派生語や judo-man のような複合語はともに柔道に携わる人に対する名前であるが、一方 'an expert in judo' のような句は陳述である。 (Bauer (2003: 135))

「形容詞＋名詞」形について、以下の (1) と (2) にそれぞれ、英語と日本語の句と複合語の例を挙げてみよう。下の (a-c) の各々の左側が句、右側が複合語である。

- (1) a. black board (黒い板) / blackboard (黒板)
b. green house (緑の家) / greenhouse (温室)
c. big bang (大きな音) / big bang (ビッグバン：宇宙大爆破)
- (2) a. 甘い酒 / 甘酒
b. 高い台 / 高台
c. 安い物 / 安物

例えば(2a)の「甘酒」は、米の飯と米麴とを混ぜて醸した甘い飲料に対して「甘酒」と名付けたものであり、「この甘酒、あんまり甘くないね。」などと言ったとしても矛盾はない。複合語「甘酒」は対応する句「甘い酒」とは違って意味が特殊化していて、酒の集合と甘いモノの集合の共通部分(つまり酒であってかつ甘いモノ)を指す交差的な読み(intersective reading)はもたないからである。それに対して、「甘酒」を「甘い酒」という句に置き換えて「この甘い酒、あんまり甘くないね。」などと言えば、もちろん矛盾してしまう。複合語と句は、名前か陳述かという違い、意味的な合成性の違い、強勢のパタンの違い(英語の場合)、連濁の有無や屈折接辞の有無(日本語の場合)など、機能・意味・音韻・形態の点で違いが見られることが分かる(詳しくはShimamura(2007)を参照)。

日本語には「形容詞+名詞」形の句が語彙化されて名付けになっている以下の(3)のような表現(島村(2000: 346))もあるが、数は限られており例外的なもののみなしてよいだろう。

- (3) 小さな政府, 小さな親切, 黒い霧, 白い大陸, 赤い恋, 赤い羽根 (赤い色の羽根の意味なら通常の合成的な句)

しかしながら、句は陳述、語は名付けという具合に構造と機能が常に1対1に対応するのかという問題が出てくるのは当然であり、最近興味深い研究がいくつか見られる。学術雑誌 *Word Structure*, Vol. 2, No. 2(2009)では“Words and phrases - nominal expressions of naming and description”という特集を組んで、「形容詞+名詞」形を主に取り上げてこの問題を扱っている。Schlücker and Hüning (2009b)による“Introduction”に続いて7つの論文が所収され、そのうち3つの論文 Masini (2009), Booij (2009b), Gunkel and Zifonun (2009)は、名付けの機能をもつと考えられる語彙化された句を扱っている。他にも Schlücker and Hüning (2009a), Hüning (2010), Booij (2010)などがあり、現在も議論が進行中である。

本稿で考察したいのは、名付けの機能をもつような句が存在するのであれば、逆に句と同じく陳述の機能をもつような語があるかどうかということである。Spencer (2011)は、Lieber, Rochelle and Pavol Štekauer (eds.) (2009), *The Oxford Handbook of Compounding* の書評論文であるが、この論文で Spencer は、複合語において形容詞ないし名詞が限定的に名詞を修飾するとはどういうことなのかについて考察し、その修飾の仕方を、句における修飾と対照させて

おり、以下のような興味深い指摘をしている。「形容詞+名詞」形の複合語は一般的には名付けの機能を持ち、複合語内部の形容詞は限定的(attributive)修飾語の働きはしない。しかし言語によってはChukchi (cf. Spencer (1995)) などのように、複合語内の形容詞が句の中の形容詞と同じように名詞を限定的に修飾して交差的な読みをもつことがあり、「形容詞+名詞」形の複合語の場合、英語のように数が限られ意味も非合成的な言語から、ドイツ語のように時にこの形の新しい複合語が作られるような言語、さらにはChukchiのように完全に生産的で事実上は句とほぼ同じ性質をもつような複合語が存在する言語まで様々である、と述べている。

本稿の構成は以下の通りである。第2節ではBooij (2010)の提案について、オランダ語で名付けの機能をもつ「形容詞+名詞」形の句の構造を中心に概説する。第3節と第4節ではそれぞれ、英語と日本語で、Booij (2010)の提案する「統語的複合語」の構造が名付けの機能をもつかどうかを検討する。日本語の場合、形容詞同様に形容動詞も名詞を修飾する働きがあるので(例:「静かな夜」)、第4節では、「形容詞+名詞」形だけでなく「形容動詞+名詞」形も含めて、これらの複合語と名付けの関係について考える。第5節はまとめである。

2 オランダ語の「形容詞+名詞」形: Booij (2010)の提案

Booij (2010)は、構造的に一定の制限をもつ固定した句がいろいろな言語で実際に観察され、そのような句は名付けの機能と密接に結びついていると主張している。例えば英語の属格複合語のN-GEN + N(例: women's magazine)やフランス語のN + PP(例: moulin à vent 'windmill')などを挙げ、いろいろな言語で名付けの機能をもつ句の構造が存在すると述べている。以下ではオランダ語の「形容詞+名詞」形の句に言及しながら、Booij (2010)の提案を概説する。

(4)のオランダ語とドイツ語の「形容詞+名詞」形を参照されたい。

(4) オランダ語	ドイツ語	
句	複合語	意味
bijzonder-e zitting	Sonder-sitzung	'special session'
gebruikt-e batterijen	Alt-batterien	'used batteries'
geheim-e nummer	Geheim-nummer	'secret number'

(Booij (2010: 176))

上の(4)のオランダ語の「形容詞+名詞」形の句はドイツ語の「形容詞+名詞」形の複合語とは違って、形容詞は主要部の名詞と性・数・(不)定性((in-)definiteness)に関して一致しなければならず、-eは一致を示す屈折接尾辞である。(なお一致を示す形容詞の屈折接尾辞は、名詞句が不定で主要部名詞が単数かつ中性である場合を除いては常に-eである¹。)

さらに Booij (2010: 177) は次のように述べている。例えば (5a, b) はそれぞれ赤キャベツ、黄熱病の意味であり、特定の種類のキャベツ、特定の種類の病気を表していて交差的な読みはもたない。

- (5) a. rode kool
b. gele koorts

つまり(4)や(5)のオランダ語の「形容詞+名詞」形は句の構造をもちながら名付けの機能をもつものであり、(6)にあるように形容詞 rode と gele の前に、これらの形容詞を修飾する語を付けることはできない。

- (6) a. *erg rode kool 'very red cabbage'
b. *heel gele koorts 'very yellow fever' (Booij (2010: 178))

そこで Booij (2010: 177) は、語を句と区別する基準の一つとして従来から提案されてきた「形態的緊密性」(Lexical Integrity)の原理 (Anderson (1992), Bresnan and Mchombo (1995), Di Sciullo and Williams (1987) 等) に言及して、Anderson (1992: 84) の示した原理を、(7)にあるように(7a)と(7b)に分けるべきであると提案している²。(a)と(b)の記号は便宜的に筆者が付けたものである。)

- (7) 統語[規則]は
(a) 語の内部構造を操作せず、
(b) 語の内部構造にアクセスすることもしない。

オランダ語の(5)のような「形容詞+名詞」形の句の場合、(6)のように修飾語の付いた形は許されないのだから上記の形態的緊密性の原理の(7a)には合致しているが、しかし名詞との一致の統語規則によって、形容詞が屈折接尾辞 -e の付いた形になるので、(7b)には違反していることになる。Booij (2010)

はこのような特別のタイプの句を「統語的複合語」(syntactic compound)と呼び, $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつと主張する。この構造は形容詞の編入によって作られ, A^0 (形容詞) は句を投射しないので前に修飾語を挿入することができず A^0 と N^0 は常に隣接する。このような統語的複合語に対して, 厳密な意味での形態的複合語(morphological compound)は上記(7a)と(7b)の両方に従うものであり, $[A N]_N$ の構造をもち, この構造全体がそのまま N^0 の位置に挿入されるとしている。

Booij (2010) はさらに, ギリシャ語の「形容詞+名詞」形について, 上記の形態的複合語と統語的複合語に加えて, N' の構造 $[A^0 N^0]_{N'}$ を提案している(詳しくは Booij (2010: 179-181) 参照), オランダ語の(4)や(5)の「形容詞+名詞」形はこの N' レベルの構造なのか上記の $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造なのか, 現在のところはっきりしないと述べている(p. 186, p. 188)。しかしどちらの構造にせよ, A^0 が投射しないという特徴は同一である。さらに Booij (2010) は, 上記の構造において A^0 が投射しないという制限があるということと, この構造が名付けの機能をもつということの間には互いに密接な関係があるということを強調し(上記の構造は時に“A + N phrasal name”と記されている), 形式と意味(機能)とのこのような対応関係を, 構文形態論(construction morphology)の立場から, 構文的スキーマ(constructional schema)として具体的に定式化している(詳しくは Booij (2010: 187) 参照)。句であっても, A^0 が投射しないという特定の構造的制限のある句であれば, 名付けの機能をもつということを主張しているわけである。

以上本節では, Booij (2010) の提案にそって, (5)のような「形容詞+名詞」形の句がもつ $[A^0 N^0]_{N^0}$ (ないし $[A^0 N^0]_{N'}$) の構造の特徴, およびこの構造と名付けの機能との密接な関係について, 主としてオランダ語を中心に概説してきた。Booij (2010) はさらに, 本稿での説明は省略するが, オランダ語以外の言語でも上記の構造をもつ「形容詞+名詞」形の例を具体的に挙げている(Booij (2010: 178-179))。上述のように Booij (2010) はオランダ語の(5)のような「形容詞+名詞」形の構造が $[A^0 N^0]_{N^0}$ なのか $[A^0 N^0]_{N'}$ なのか現段階では明らかでないと言っているが, 以下では英語との比較を容易にするために, 統語的複合語として $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつと仮定した上で議論を進める。

3 英語の「形容詞＋名詞」形の構造

Booij (2010) はオランダ語の名付けの機能をもつ (5) のような句に対して $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造を提案したとき、Sadler and Arnold (1994) が提案した英語の「形容詞＋名詞」形の構造と同じであるという趣旨のことを述べている (p.177, p.182)。Booij (2010) の示す実例のうち上記の構造をもつものは、(5) などのように意味的に(ある程度まで)不透明なものが多いように思われる。オランダ語で意味が完全に合成的な「形容詞＋名詞」形に対しては Booij (2010) がどのような構造を仮定しているのか明らかではないが、本節では、英語の $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造は Sadler and Arnold (1994) で主張されているように統語部門と形態部門の両方に共通の構造であり、どちらの場合も合成的な意味をもつということを述べる。また合わせて、この構造と名付けの機能の関係についても考察する。

3.1 「形容詞＋名詞」形: Sadler and Arnold (1994) の分析

前節で、Booij (2010) で提案されている「統語的複合語」の $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造の特徴を見たが、この構造は Sadler and Arnold (1994) では「'小'構造」(‘small’ construction) ないし「語彙的構造」(lexical construction) と呼ばれる構造であり、形態構造(語構造)と統語構造の両方に共通の構造であると考えられている。Sadler and Arnold (1994) によれば、例えば a happy person および an extremely happy person と他方 a person happy about her work の統語構造は異なっていて、前者の2つのみがこの $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造を含むことになる。この提案の根拠に関しては詳しくは Sadler and Arnold (1994) を参照されたい。上述のようにこの構造は統語部門と形態部門に共通の構造であるが、しかし語がこの構造をもつ場合には、先の (7) の形態的緊密性の原理によって統語規則は適用できない。これは以下の Sadler and Arnold (1994) に示された例が許容できないことから明らかであろう。

- (8) a. *solar extreme / dry / unpleasant heat
 b. *very solar heat (Sadler and Arnold (1994: 210))

英語の形容詞のうち、 $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造(「'小'構造」)をもち語の内部に生起する形容詞として Sadler and Arnold (1994) が挙げているものはすべて、(8) の solar のような関係的形容詞 (relational adjective) (連想的形容詞 (associative

adjective))である。しかしながら名付けの働きをする「形容詞+名詞」形の構造を $[A\ N]N$ と $[A^0\ N^0]N^0$ とに区別する Booij (2010) の分析を採用するならば, solar system, medical building, dental care のような関係の形容詞と名詞から成る複合語, および, darkroom, big bang のような帰属形容詞 (ascriptive adjective) と名詞から成る複合語は, $[A^0\ N^0]N^0$ の構造ではなく, 形態的複合語として $[A\ N]N$ の構造をもつとみなすべきだと思われる。どちらの複合語も形容詞の前に修飾要素を付けることができず交差的な読みはなく, また第1強勢も(例外はあるが)前にある形容詞に置かれる。また分布も限られており, darkroom は「暗室」の意味の複合語であっても wide-room, dirty-room のような複合語は実在しない。同じように関係の形容詞の場合も分布が限られているものがある(例: vernal equinox 対 *vernal cabbage) (Giegerich (2005, 2009))。しかし Giegerich (2005, 2009) によれば, 関係の形容詞と名詞から成る複合語の中には one 代名詞化 (one-pronominalization) の適用が許される複合語があり, そのような複合語では統語とレキシコンの重複が見られる。したがって現段階では, 関係の形容詞と名詞から成る複合語の構造は $[A\ N]N$ であると断定はできないが, 本稿では一応形態的複合語の $[A\ N]N$ の構造をもつものとみなすことにする³。

3.2 複合語内部の「形容詞+名詞」形

以下の(9)から明らかのように, $[A\ N]N$ の構造をもつ形態的複合語はより大きい複合語の非主要部の位置に生起することが可能である。これに関しては別段問題はないだろう。以下の例は筆者が Shimamura (2001) で挙げたものである。(出典は同論文を参照されたい。本稿では以後, 筆者の先行研究に示された実例に言及する時にはいちいち出典は明記しない。)

- (9) [old-boys]network, [white-water]rafting, [big bang]theory, [medical building]site,
[solar house]planning

しかしながら複合語の非主要部に生起するのは上の(9)のような形態的複合語だけではない。ここで注意したいのは, 意味がほぼ合成的で交差的な読みをもつ「形容詞+名詞」形の表現もこの位置に生起可能だということである。このことは筆者が Shimamura (2001) で指摘し, Bennett (2002) もほぼ同様の指摘をしている。以下の(10)は Shimamura (2001) で, (11)は Bennett (2002) で示された実例の一部である。

- (10) [small car] driver, [fresh fish] shop, a [high profit] trade, a [cheap-price] series, [gray elephant] hunter, [used computer] seller, [gifted children's] school, small green [little girl's] bicycle
 (11) [old clothes]shop, [small-town]life, [warm-beer]lovers

(10)と(11)の複合語においては、角括弧内の「形容詞＋名詞」形は意味がほぼ合成的でしたがって([A N]Nではなく)[A⁰ N⁰]N⁰の構造をもつと思われる「形容詞＋名詞」形が複合語の内部にも生起している。しかしながら[A⁰ N⁰]N⁰が統語上に現れる時とは違い、複合語内部に生起する場合にはあくまでも形態的緊密性の原理に従って、修飾語を形容詞の前に付けたり形容詞と主要部名詞との間に他の要素を介在させたりすることは認められない。このことはShimamura(2001)で示した以下のような事実から明らかである。

- (12) *[very small car]driver, *[rather late-night]meeting, *[small green car]driver

次に注目したいのは、[A⁰ N⁰]N⁰の構造が複合語内部の非主要部の位置に生起するときには、意味はほぼ透明であっても名付けの機能をもつということである。第1節ですでに、この構造は名付けの機能と密接に結びついているというBooij(2010)の提案を紹介したが、もし英語の場合も[A⁰ N⁰]N⁰の構造が名付けと密接に関連しているのであれば、Booij(2010)の提案は英語の事実からも支持できることになるだろう。以下では複合語内部に現れる[A⁰ N⁰]N⁰の構造について、名付けとの関連を中心に考察してみたい。

3.3 複合語内部の「形容詞＋名詞」形と名付けの機能

統語と形態の相互の関係を解明しようとするこれまでのいくつかの研究で、複合語の内部に句の生起が可能かどうかということが議論されてきた。句(XPレベルないしX'レベル)が生起可能であるという主張(Sproat(1993)等)、語彙化(lexicalize)ないし慣習化(institutionalize)された場合のみ句が現れ得るとする提案(Bresnan and Mchombo(1995), Carstairs-McCarthy(2002, 2010)等)、複合語内部には句は生起できないとする立場(Roeper and Siegel(1978), Roeper(1988)等)など様々である。さらにはLieber(1992)のように、語根複合語(root compound)なら非主要部は句範疇まで拡張可能であるが、総合複合語の場合は語彙範疇に限られるとする提案もある。

(10)や(11)が示すように、意味的にほぼ透明な[A⁰ N⁰]N⁰の構造が複合

語の非主要部に生じ得ることは明らかな事実である。それにもかかわらず複合語の非主要部に句が生起可能かどうかに関して、従来から上述のような意見の違いが見られたのはなぜなのであろうか。それは、少なくとも部分的には、 $[A^0 N^0]N^0$ の構造をもつ表現が語の内部に生起するときには、それらの表現自体も名付けの働きをもつ表現(つまり、実際に名前を付ける価値のある (nameworthy) 表現) でなければならず、 $[A^0 N^0]N^0$ の構造をもてばどんな表現でも無条件に許されるというわけにはいかないからである。具体的に例を見ながら確認してみよう。

(10) の [small car] driver を示したのは Sproat (1993) であり、Sproat (1993) がこれを挙げたのは、上述のように複合語の非主要部には原則的に句の生起が可能であるということを示すためであった。しかし Sproat (1993) は個々の複合語が実際に句を含むことができるかどうかは語用論的に決定されると述べて (Sproat (1993: 251-252)), 例えば small car driver は容認されるが green car driver は容認度が下がるということを指摘して、両者の容認度の違いに関して次のような興味深い説明をしている。複合名詞は語として名付けの機能をもつものであるから、非主要部に現れる表現もある一つのタイプを示すものでなければならない。small car は車の一つのタイプとみなし得るが、green car はそのようにはみなし得ない。しかし文脈によっては、例えば (13) のような文脈では green car は車の一つのタイプを示し、green car driver はごく自然である。

(13) Today is a green day: only green car drivers will be allowed to pump gas.
(Sproat (1993: 251))

Roeper (1988) は Sproat (1993) とは逆に、総合複合語の非主要部には句は決して生起できないと主張している。しかし、例えば (14) は、もし fat person が一つのクラスとして規定できるような文脈が見つかれば容認されるだろうと述べている。

(14) ?[fat person]lover (Roeper (1988: 206))

さらには、Carstairs-McCarthy (2002, 2010) は上で述べたように、句は語彙化されたり慣習化された場合にのみ語の内部に現れると主張しているのだが、Carstairs-McCarthy (2010) の挙げている以下の例に注目してみよう⁴。(component

のoがóになっているのはoに第一強勢が置かれるということであり、Carstairs-McCarthy (2010) 自身が付けているものである。強勢パターンに関してはあとで言及する。

- (15) a. [[defective compónent]problem]
 b. ?[[expensive compónent]problem]
 c. *[[Norwegian compónent]problem] (Carstairs-McCarthy (2010: 206))

Carstairs-McCarthy (2010) は、上の (15a-c) について以下のように説明している。(15a) のみが完全に許容できる。defective component は慣習化された表現でありクリシェ (cliché) であるが、他の2つの expensive component と Norwegian component はクリシェではない。defective component のみがクリシェであると Carstairs-McCarthy (2010) が言っているのは、名付けの概念に置き換えることが可能だと思われる。つまり、上の3つの component (部品) を含む表現の中で defective component (不良部品) は、ハードウェア故障で交換可能な不良部品という component (部品) の中でも特定の種類の component (部品) を指す名付けであると考えるのである。Carstairs-McCarthy (2010) の言うクリシェに関しては、後に再度取り上げる。

本節ではこれまで、英語の「形容詞+名詞」形について、Sadler and Arnold (1994) の提案にもとづいて、 $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造は統語と形態の両方に生起する構造であると仮定し、また Booij (2010) にしたがって、形態的複合語と統語的複合語を区別した。本稿の最初に挙げた (1a-c) の右側の語や (9) の複合語内部の角括弧内の語は従来から複合語とみなされてきたが、このような語はすべて $[AN]_N$ の構造をもつ形態的複合語であり、一方 (10) や (11) のように、複合語の内部に現れることができて合成的な意味をもつ「形容詞+名詞」形は、統語的複合語の $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつと仮定した⁵。さらに、 $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつ「形容詞+名詞」形の表現は意味的に透明であっても、それらの表現がより大きい複合語の内部に生起する限り、形態的緊密性の原理に従いかつ名付けの機能をもつということを指摘した⁶。

上記のような「形容詞+名詞」形に対して、統語的複合語と形態的複合語という2種類の異なった構造を仮定する分析が真に妥当なものであるためには、意味の透明度の違い以外にも何か違いがなければならない。以下、これら2種類の複合語は、強勢パターンおよび、複合語内で生起可能な位置に関しても違いが観察されるということを見ていきたい。

Carstairs-McCarthy (2010) も上と同様の例を挙げている。(15a) の defective component problem を挙げた後に (17) を挙げて、defective component はなぜ複合語の第1要素に現れるのに第2要素(つまり主要部)には現れないのかに関して多少の説明はしているが、しかし明確な結論を出すまでには至っていないように思われる。

(17) *aircraft [defective components] (Carstairs-McCarthy (2010: 208))

関係的形容詞と名詞から成る複合語に関しては、主要部に現れた以下の例が Bennett (2002) に示されている。

(18) child [sexual abuse], government [financial planning]

関係的形容詞と名詞から成る複合語(例: solar system)と帰属形容詞と名詞から成る複合語(例: big bang)に $[AN]_N$ を仮定することによって、次のような一般化が可能であると思われる。つまり、 $[AN]_N$ の構造は非主要部にも主要部にも現れることが可能であるが $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造は非主要部には現れても主要部には現れることができない。このことに関してさらに考察を加えてみよう。

Booij (2010) に従って、形態的緊密性の原理を上述の (7a) と (7b) の2つに分けるならば、英語の形態的複合語の $[AN]_N$ と統語的複合語の $[A^0 N^0]_{N^0}$ は共に、先の (7a) の原理に従って統語操作は適用されないという点では両者の間に違いはない。(7b) に関しては、英語の統語的複合語はこの原理には直接関係しない。しかし (10) (11) の複合語内の「形容詞+名詞」形の表現は意味的にはほぼ透明であること、また、通常は句に付与される核強勢規則が適用されることを考慮すると、このような表現は統語的特徴をもつと考えてよいと思われる。

Booij はすでに Booij (2009a) において、形態的緊密性の原理を先の (7a) と (7b) の2つに分けるべきであると提案して、以下の指摘をしている。複数の要素の連鎖を句と区別して語とみなすときの決定的な特徴は、語が統語的操作に対して一つのまとまった緊密な単位として振る舞うということである。したがって、語であれば、原理 (7b) の「統語規則は語の内部にアクセスしない」という制約にはたとえ違反したとしても (7a) の「統語規則は語の内部構造を操作しない」という制約には従う⁷。さらに Booij は Booij (2010:

177-178)において次のように述べている。語が形態的緊密性の原理(7a)と(7b)の両方に従うか、それとも(7a)だけに従うかによって分類すると、形態的複合語は前者、統語的複合語は後者であり、形態的緊密性の原理に基づいて語がこのように区別されることによって、語としてのまとまりがどの程度緊密なものであるのかの違いが示される。

以上が形態的緊密性の原理と、それに基づいて分類された形態的複合語と統語的複合語の違いに関して、BooijがBooij(2009a)とBooij(2010)でそれぞれ述べていることである。

本稿ですでに、 $[A^0 N^0]_{N^0}$ は $[A N]_N$ と違って、非主要部の位置には現れるが主要部の位置には現れることができないことを指摘した。これは、後者の構造が前者の構造よりも一つのまとまりとして緊密性が高いということを証明する一つの具体的な事実と見做すことができるだろう。換言すれば、主要部は非主要部よりも緊密的なまとまった単位を要求するということである。したがって、句排除の制約(No Phrase Constraint)(Roeper and Siegel(1978: 213-214), Botha(1984)等)を巡って従来その妥当性が検討された際、主として句が複合語の(主要部ではなく)非主要部に生起可能かどうかということが議論されたのは当然のことといえる。

3.5 統語構造上の「形容詞+名詞」形と名付けの機能

本節ではこれまで、英語では $[A^0 N^0]_{N^0}$ も $[A N]_N$ と同様に複合語内に生起することが可能で名付けの機能をもつということを見てきた。ここで検討しなければならないのは、前者の $[A^0 N^0]_{N^0}$ が統語上に生起する場合の名付けの機能との関連である。

統語上で $[A^0 N^0]_{N^0}$ が名詞句の中に現れた場合に、統語規則が適用されて例えば $[\text{small} [\text{green} [\text{car}]]]$ のように形容詞の積み重ねの構造になったり、あるいは程度副詞を含んだ $[[\text{very small}] \text{car}]$ の構造、あるいは等位構造を含む $[[\text{small and green}] \text{car}]$ の構造などになるが、そのような構造はどれも名付けの機能とはふつつ結びつかない。しかし統語規則の適用を受けない $[\text{small car}]$ だけが名付けの働きをすることができて、 $[\text{small car}] \text{driver}$ のように複合語の内部に生起する場合にも同じく名付けの働きをもつ。何も規則の適用されない $[A^0 N^0]_{N^0}$ が統語上に現れる場合にはもちろん様々な表現が可能で、 small car の他に fast car , new car , compact car , private car その他たくさんあるが、その中で small car など一部だけが名付けの機能をもつということになる。

第2節で見たように Booij (2010) は, $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造に関して, A^0 が投射せず A^0 と N^0 が隣接するという構造上の特徴が名付けの機能と密接に関係していると述べている。すぐ上で, 何も統語規則の適用されない $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造と言ったが, これはまさに Booij (2010) が示した統語的複合語の構造に他ならない。 $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつ英語の表現は多くが意味的に合成的であるが, しかし名付けの機能をもつことが可能であり, 実際には名付けではなく単に陳述として用いられる表現でも, 語用論的な条件が満たされれば実際に名付けとして働くことは十分あり得る, と考えるのである。

上述の考え方を Carstairs-McCarthy (2002, 2010) が挙げている事例に基づいて説明してみよう。上で, (15) の3例の「形容詞+名詞」形は $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつが, その中でも (15a) の defective component だけがクリシェになると Carstairs-McCarthy が言っていて, これは, defective component が他の2例とは違って名付けの働きをしていると言い換えることができるのではないか, ということを述べた。Carstairs-McCarthy (2010: 207) は, マニュアルや製造元の保証書などで defective component が一定の決まった表現 (例えば “Any defective component will be replaced without charge . . .”) の中で繰り返し出てきて, 一つのまとまった単位として母語話者の記憶 (レキシコン) に蓄えられるようになるとクリシェになると述べている。Carstairs-McCarthy (2002: 81-82) においても (15) と同類の例が示され, 同じような説明がなされている。そのうちの一つを挙げてみよう。

- (19) a. fresh air fanatic
b. cool air fanatic

(19a) の fresh air はクリシェであり “get / need some fresh air” や “get into the fresh air” のような決まった言い方が繰り返し現れるが, cool air が出てくるような決まった言い方はなく (19b) は適格ではないと言っている (p. 82)。これを名付けの機能で言い換えると, (19a) の fresh air は名付けの機能をもっているが, cool air は名付けにはならないから (19b) は適格ではないということである。

もっと一般的に言うと, $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつ表現のうち一部の繰り返し使われる慣習化された表現のみが実際に名付けとして機能し, 複合語内に生起できると考えられる。クリシェである「形容詞+名詞」形の表現, つまり名付けの働きのある表現は通常, Carstairs-McCarthy (2002) の言うように, 実生活で繰り返し何回も一定の言い方の中に出てくる慣習的な表現といえる

であろう。

以上本節の議論から、英語においても $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造と名付けの機能との関係は明らかであろう。ただ、オランダ語で $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつとして Booij (2010) の挙げている実例は、ある程度まで意味的に語彙化された表現であるように思われる。また、オランダ語で $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造が複合語内部の主要部と非主要部にそれぞれ生起する場合などの実例もいくつか示されているが (Booij 2010: 183-186)、今後、英語に関して本稿で指摘した $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造と Booij (2010) が示した構造の類似点と(もしあれば)相違点について明らかにしたい。

次節では日本語の「形容動詞+名詞」形の複合語に注目して、 $[A^0 N^0]_{N^0}$ と $[AN]_N$ の構造の区別、および構造と名付けの関係について考えてみたい。

4 日本語の「形容名詞+名詞」形の構造と名付けの機能

日本語の「形容詞+名詞」形の複合語に関しては、すでに第1節の(2)に例を挙げた。日本語では形容詞の多くが和語であり数も多くはなく、対応する句に比べると複合語の数も限られている。日本語には名詞を限定的に修飾する範疇として、形容詞の他に形容動詞 (Adjectival Verb) がある。この形容動詞と言われている範疇は、実際には形容詞と名詞の両方の性質をもつ範疇なので (Shibatani (1990), Kageyama (1982, 1993) 等)、以下本稿では「形容名詞」 (Adjectival Noun) と呼ぶことにする。また、形容名詞の語尾の「な」「だ」「に」(「静かな」「静かに」「静かだ」) を助動詞とみなす研究者もいるが、本稿では屈折接尾辞であると仮定しておく。形容詞は和語がほとんどで、漢語は「可愛い」「四角い」や派生語の「騒々しい」「仰々しい」などわずかである (森田 (2008: 163))。しかし形容名詞は和語(「静か(だ)」「幸せ(だ)」)に限られず、むしろ「容易(だ)」「親切(だ)」など漢語の方が多い。「クール(だ)」「リッチ(だ)」など外来語もある。以下、和語および漢語の形容名詞と名詞の組み合わせが句になる場合と語になる場合を対比してみたい。

4.1 「和語形容名詞+名詞」形

和語の形容名詞の場合、名詞と組み合わせられて複合語として用いられるのは例外的で一部の固定した形しか存在しない。ちなみに、森田 (2008: 163) に出ている和語形容名詞のうち (20) の5語については、『広辞苑』に記載されている複合語は (21) の語彙化した1語のみである。

- (20) 明らか, 浅はか, 鮮やか, 当たり前, あやふや
 (21) あやふや人形

4.2 「漢語形容名詞+名詞」形

次に漢語の形容名詞であるが, 森田 (2008: 164) に出ている語のうち (22) の5語について『広辞苑』で検索すると, 複合名詞が記載されているのは「案外」と「完全」だけであり, (23) に示したように「案外」については「案外者」が記載され, 「安全」については, (23) に示した3語の他に, 合わせて27語が記載されている。

- (22) 案外, 完全, 貧弱, 偉大, 格別
 (23) 案外: 案外者
 完全: 完全裏書, 完全花, 完全気体

しかし漢語の形容名詞の場合, 和語に比べると, 必要に応じてかなり自由に複合語が作られると考えられる。蔡 (2009) は, データベースを利用して使用例の多い2字漢語の形容名詞100語に限定した上で, 2字漢語の形容名詞と名詞の組み合わせに関して, 新聞のコーパスの検索をもとに次のような指摘をしている。漢語の形容名詞の中には, 「形容名詞+名詞」形の複合語が存在しないものが33語存在する(例: 「曖昧」「元氣」「大胆」)。しかしその一方, 形容名詞の中には, 辞書などに記載されている固定的な複合語だけでなくその場で必要に応じて作られる複合語の存在する形容名詞が37語ある。それら37語の形容名詞のうち以下の(24)の6つの形容名詞について, ネットで検索したところ, かなりの数の「形容名詞+名詞」形の複合語が見つかった。それぞれの形容名詞について複合語を4例ずつ(25)に挙げておく。

- (24) 正式, 主要, 重要, 有名, 有力, 危険
 (25) 正式: 正式サービス, 正式名称, 正式行事, 正式譲渡契約書
 主要: 主要ニュース, 主要統計, 主要新聞, 主要バスのりば
 重要: 重要単語, 重要証人, 重要政策, 重要文書
 有名: 有名私立大, 有名企業, 有名美術館, 有名俳優
 有力: 有力候補, 有力企業, 有力メンバー, 有力情報
 危険: 危険物, 危険箇所, 危険人物, 危険レベル

(25) に示したものは『広辞苑』には記載がなく、意味もほぼ透明で交差的な読みをもつ。つまり(25)の複合語の場合、対応する句(屈折接尾辞「な」の介在する形)と意味がほとんど同じであると考えてよいと思われる(例:「正式な名称」→「正式名称」「危険な箇所」→「危険個所」)。なお(25)は、形態的緊密性の原理に従って修飾語を前に付けることはできないことから(26参照)、語であることは明らかである。

- (26) * [ひじょうに重要] 政策 (cf. [最重要] 政策)
 * 重要 [我が国の] 政策 (cf. 我が国の [重要政策])

(25) に挙げた複合語が対応する句と意味がそれほど大きく違っていないということは、名付けの観点からみれば、これらの複合語には(個々の語により違いがあるようには思われるが)名付けの働きがあるとはあまり感じられないということである。

複合語の構造を統語的複合語と形態的複合語に分けるという Booij (2010) の考え方を踏襲して、本稿では、漢語の形容名詞を含む複合語((23)と(25))は、和語の形容詞ないし形容名詞を含む複合語(先の(2)の右側と(21))と同じく形態的複合語であり、他方、後に取り上げる接尾辞「的」の付いた形容名詞(例:「文化的」)を含む複合語(例:「文化的な生活」)は統語的複合語であると考えたい。

漢語の形容名詞を主要部とする複合語には、上の(25)のようにかなり意味の透明なものと、(23)のように語彙化されたものがあるが、しかし両者を構造的に区別すべきであるという積極的な理由は何もないように思われる。これまで見てきた形態的複合語——例えば英語の *mental hospital*, *greenhouse* のような複合語、日本語で形容詞を含む(2)のような複合語、和語の形容名詞を含む(21)のような複合語——はすべて名付けの機能をもつものであった。漢語の形容名詞を含む複合語はこれらの複合語と同じく形態的複合語でありながら、(25)のように句とほぼ同じく透明な意味をもち名付けとは感じられないものが多いのはなぜなのだろうか。和語よりも漢語の形容名詞の方が数が多いということはすでに述べたが、これだけが理由であるとは思われない。今後検討してみたい。

これまで扱った「形容名詞+名詞」形では形容名詞は和語も漢語も接辞の付かない単純形であった。以下では接尾辞「的」の付いた形の派生形容名詞に焦点を当てながら「形容名詞+名詞」形の句と語の関係を考察したい。

4.3 「的 形容名詞+(な)+名詞」形

「的」は多くの場合に漢語名詞に付加されて形容名詞を導く働きをするひょうじょうに生産的な接尾辞である⁸。この接尾辞は原則として漢語の形容名詞には付加されないが(例:「簡単(な)」「*簡單的(な)」), しかし例外的に「的」が付いた形も同時に存在することがある。例えば「健康的(な)」と「健康(な)」があり, このような場合は多少なりとも意味が異なるのがふつうである(原(1986: 75))。原(1986: 73-74)によれば, 明治時代の翻訳グループが英語の -tic (例: analytic) を日本語にするときに中国語の「的」を使ったのが始まりであるという。後続する名詞を修飾する場合は初めのうちは「の」を伴う形がほとんどであり(例:「科学的ノ反応」), 現在のように「的な」の形が出現したのは明治15年以降であり, 明治20年前後から「的」の付いた形容名詞が広範囲に使用されるようになったという。このように「的」の付いた形容名詞が日本語の語彙に登場したのは和語の形容名詞に比べるとずっと遅いが, 逆に数はずっと多い。

「的」付き形容名詞が名詞を修飾する場合, 例えば「個人的な見解」と「個人的見解」のように, 間に活用語尾「な」が介在する形と介在しない形がある。影山(1993)や蔡(2007)などで行われているが, (27)から明らかのように, 「的」付き形容名詞のほとんどすべてに関して「的な名詞」と「的名詞」の両方の形が可能で, 意味の違いはほとんどないといえる^{9, 10}。

- (27) 意図的な行為／意図的行為, 紳士的な態度／紳士の態度, 協力的な態度／協力的態度, お役人的な思想／お役人的思想, 人間的な扱い／人間的扱い, 心理的な影響／心理的影響, 知的な好奇心／知的好奇心, 空想的な産物／空想的産物, 専門的な知識／専門的知識, 教育的な見地／教育的見地, 科学的な反応／科学的反応, 美的なセンス／美的センス, 絵画的な風景／絵画的風景

以下便宜上, 上記の各々のペアで「な」を含む形と含まない形をそれぞれ「的な+名詞」形, 「的+名詞」形と記すことにする。両者に意味の違いはないが, 「的な+名詞」形が句, 「的+名詞」形が語(複合語)という違いがある。このことは形態的緊密性の原理によって確かめることができ, 影山(1993)には以下のような事実が示されている。

- (28) a. 庶民的な, 親しみやすい性格
 b. *庶民的親しみやすい性格
 c. 親しみやすい庶民的性格 (影山(1993: 372))

(28b)は語である「庶民的性格」の内部に「親しみやすい」が介在していて、形態的緊密性の原理に違反している。

さらに、形態的緊密性の原理との関係で、句としての「的+名詞」形と語としての「的+名詞」形の振る舞いの違いを具体的に見てみよう。

- (29) a. ひじょうに協力的な態度
 b. ??ひじょうに協力的態度
 c. 極端に官僚的な姿勢
 d. ??極端に官僚的姿勢

上の(29a, c)と違って(29b, d)は適格ではないが、後者の「的+名詞」形が語であるにもかかわらず「ひじょうに」と「極端に」が語内の「的」形容名詞を修飾しているからである。さらに(30)(31)を参照されたい。

- (30) a. 盗聴捜査に批判的な見解
 b. *盗聴操作に批判的見解
 (31) a. 公平で客観的な基礎資料
 b. ??公平で客観的基礎資料

(30a)の「盗聴捜査に」は、形容名詞「批判的な」の補部に相当する表現である。(30b)は、この「盗聴捜査に」が語である「批判的見解」に含まれる「批判的」の補部になっているために容認できない。また、(31a)では「公平で客観的な」の表現は等位構造になっているが、(31b)ではこの構造の中にある「公平で」が語である「客観的基礎資料」の内部の「客観的」と等位関係になっているために容認できない¹¹。「的+名詞」形が語であるということは、(32)のように空所化(gapping)が容認しにくいことから証明される。

- (32) a. 彼は鈴木さんには協力的な態度をとり、山田さんには批判的な態度をとった。
 b. 彼は鈴木さんには協力的な、山田さんには批判的な態度をとった。

- c. 彼は鈴木さんには協力的態度をとり、山田さんには批判的態度をとった。
- d. ??彼は鈴木さんには協力的、山田さんには批判的態度をとった。

これまで「的+名詞」形が句ではなくて語であるということを、形態的緊密性の原理に即して確認した。

さらに、この形が「的な+名詞」形には見られない語彙的な性質をもつということも、この形が語であることの傍証になるだろう。蔡(2007)は多くの場合に「的な+名詞」形が「的+名詞」形に交替可能なことに注目し、計量的な調査に基づいて、「的+名詞」形が最も多く見られるのは形容名詞と名詞がともに二字漢語の名詞の組み合わせであり、この組み合わせは、4字漢語複合名詞や和語複合名詞の構成において最も優勢な組み合わせであると述べている。このような傾向は語である「的+名詞」形にのみ当てはまる傾向であり、句である「的な+名詞」形にはこのような傾向が観察されることはまずないだろう。また上ですでに、ほとんどの場合に「的な+名詞」形に対して「的+名詞」形が対応すると述べた。しかし、「的」形容名詞の後に来る名詞が漢字一字である場合には「的+名詞」形は容認できないように思われる。例えば、蔡(2007: 21)で漢字二字と漢字一字の組み合わせの実例として挙げられている「対外的な面」や「消極的な点」などは、対応する「的+名詞」形は筆者には許容できない(「??対外的面」, 「??消極的な点」)。

蔡(2007: 19)は和語の形式名詞の場合には「的な+名詞」形を「的+名詞」形に交替不可能であると指摘している(例:「*事務的こと」「*一時的もの」)。しかし和語の形容名詞だけではなく、和語の普通名詞(例:「魅力的な国」)や上述の漢語の名詞も含めて漢字一字に相当する単一形態素の場合にはすべて、「的+名詞」形との交替は許容できないように思われる(「??魅力的国」「??対外的面」)。なお、上記の「魅力的な国」に対して「??魅力的国」は許容できず「魅力的国家」なら許容できる。この事実は高橋(2009: 129)で指摘されているが、高橋(2009)は別の面からの説明をしている。しかし語種や形態素の数にもとづいた説明の方が妥当ではないかと考える。一般に語は句とは違い、何らかの語彙的な特異性が観察されることは明らかである(影山(1993)などを参照)。

4.3.1 複合語としての「的 形容名詞+名詞」形の構造

次に複合語としての「的+名詞」形の構造を検討してみたい。

上で見たように「的+名詞」形(「的」派生形容名詞のすぐ後に名詞が続く形)の複合語はすべて意味が完全に透明だが、先の「単純形容名詞+名詞」形の複合語は意味が透明なものだけではなく、語彙化されて不透明なものもある。この事実から、Booij(2010)の提案する $[A^0 N^0]_{N^0}$ と $[A N]_N$ の区別をすれば、これら2種類の複合語は構造が異なると推測される。結論から言うと、「的+名詞」形には統語的複合語の $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造、「単純形容名詞+名詞」形には形態的複合語の $[A N]_N$ の構造を当てるのが妥当であると考えられる。このことを証明するために以下で、第3節で扱った英語の「形容詞+名詞」形の複合語の場合と同様、i)複合語内に生起する場合の位置、ii)アクセント型の2点に関して、両者の違いを指摘したい。

まず「的+名詞」形と「単純形容名詞+名詞」形に関して、両者が複合語内で主要部と非主要部のどちらに生起可能かを見てみよう。まず後者の「単純形容名詞+名詞」形は、上の(25)のように意味が透明で辞書に記載されていないようなものでも主要部に現れることができる。以下を参照。

- (33) 20世紀日本[重大事件], フィギュア[有名選手], 日本史[重要事項], 秘密[重要書類], 経済[主要統計], アジア[主要各国], 豪華[有名美術館], 市内[主要バスのりば], 学長[有力候補]

当然非主要部にも現れ得る。

- (34) [主要5カ国]首脳, [完全犯罪]計画, [有名美術館]案内図, [重要事項]一覧表

次に「的+名詞」形に移るが、複合語の主要部が動名詞(verbal noun)(影山(1993))である場合には、「的+名詞」形は非主要部の位置に自由に現れることができると思われる。(35)を参照。

- (35) [基礎的知識]獲得, [初歩的ミス]続発, [普遍的課題]追求, [理論的根拠]提示, [心理的影響]重視

複合語が語根複合語(root compound)である場合は、その非主要部の位置に「的+名詞」形が生起する例は(35)に比べると数はずっと少ないと思われるが、(36)のような例がある。

(36) [歴史的事実]一覧, [公的資金]論, [前衛的作品]展示会

次に「的+名詞」形が主要部に現れることが可能かどうかということであるが、(37)から明らかのように、これは容認できない。

- (37) a. * 衝撃 [歴史的事実] (cf. 歴史的 [衝撃事実])
 b. * 予備 [基礎的知識] (cf. 基礎的 [予備知識])
 c. * 科学 [専門的知識] (cf. 専門的 [科学知識])
 d. * 破壊 [暴力的行為] (cf. 暴力的 [破壊行為])

さらに、「的+名詞」形と「単純形容名詞+名詞」形には音韻的な違いがある。影山 (1993) で指摘されていることであるが、例えば「有名選手」の場合、形容名詞の「有名」と名詞の「選手」の2語は通常の複合語アクセント型に従って全体でひとつのアクセントの山になる。一方「的+名詞」形の場合、「積極的姿勢」では「積極的」と「姿勢」の間に短いポーズがあり、2つの語がそれぞれ単独で発音されたときのアクセントを保持している。

以上、「単純形容名詞+名詞」形の複合語と、「的+名詞」形の複合語について、意味、形態、音韻の面から比較・対照を試みた。前者は形態的複合語の $[ANN]_N$ の構造、後者は統語的複合語の $[AN^0 N^0]_{N^0}$ の構造 (AN は Adjectival Noun (形容名詞) のこと) をもつと結論することができるだろう。日本語では英語と異なり、「形容詞+名詞」形の複合語で $[A^0 N^0]_{N^0}$ の構造をもつものはないと思われる。本稿の初めに挙げた (2) にある複合語などすべて $[AN]_N$ の構造である。

日本語の複合語の上記2つの構造は、前節で見た英語の複合語の場合と平行に考えることが可能だと思われる。先の (10) にある英語の複合語 $[small\ car] driver$ において、この複合語内に生起する $small\ car$ の意味が透明であるように、「的+名詞」形の「協力的態度」は意味が完全に透明である。それに対して英語の $big\ bang$ も日本語の「甘柿」も意味的に語彙化されている。また形態的には、英語の $small\ car$ も日本語の「協力的態度」も共に、複合語の非主要部の位置には生起できるが主要部の位置には生起できない。さらに、英語の $[small\ car] driver$ と $[big\ bang] theory$ では強勢曲線が異なるが、それと同じように「協力的態度」と「単純作業」のアクセント型は異なる。

4.3.2 「的形容名詞+(な)+名詞」形の句と語の対応

上で、句としての「的+名詞」形と語としての「的+名詞」形は意味的にほとんど相違がなく、後者の複合語が常に前者の句に対応して存在することを見た。この点は「単純形容名詞+名詞」形の複合語と大きく異なることであり、その理由を説明する必要がある。現段階では明確な提案をすることはできず今後の課題とせざるを得ないが、一つの可能性は影山(1993)で示されたS構造複合の考え方であろう。統語構造上の名詞句内部に「的」形容名詞と名詞がそれぞれ別個に導入され、S構造の段階で「的」形容名詞が名詞に編入されると「的+名詞」形の複合語が導かれるとする分析である。以下で影山(1993)のS構造複合の分析を概説しながら、今後の検討のヒントになる点やS構造複合と仮定する場合の疑問点などを示してみたい。

影山(1993)によれば、単純形の形容名詞の場合は、屈折語尾の「な」「だ」「に」がなければ形態上述語であることが明瞭にならないので、統語部門においてこれらの語尾が単純形の形容名詞に付加されなければならない。一方、接尾辞「的」はもっぱら形容名詞を導く接尾辞なので、「的」形容名詞は屈折接尾辞がなくても述語として認可できる。つまり、S構造の段階で「的+名詞」形が作られるときにはまだ屈折語尾はもたず、音韻部門において初めて語尾が出現する。また、上ですでに触れたように、「的」形容名詞は屈折語尾がなくても述語と認定できるが、一方単純形の形容名詞は統語構造において屈折語尾を伴わなければならないので、屈折語尾を削除して以下のような複合語を作ることはできないという。

(38) *[活発:性格], *[克明:描写]

以上が「的+名詞」形の複合語に関して影山(1993)で示されている分析の概略であるが、この形の複合語の形成をS構造レベルでの形容名詞編入とみなすときの一つの疑問は、統語的編入といいながら、日本語では名詞への編入を受ける形容名詞(ないし形容詞)が「的」付き形容名詞だけであるという点である。形容詞はもちろんのこと、「的」付き形容名詞以外の形容名詞はすべてこの統語的編入の対象ではない。「的」はもっぱら形容名詞を導く接尾辞なので、影山(1993)の言うように「的」形容名詞は屈折接尾辞がなくても述語として認可できるといえるかもしれない。事実、「的+名詞」形が名詞を前位修飾するときにはその屈折語尾は必ず「な」になる。一方漢語の単純形の形容名詞の場合は個々の語によって、語尾が「の」ではなく

「な」の方がずっと優勢な語(例:「重大」「簡単」「有名」と、逆に「の」がずっと優勢な語(例:「特定」「直接」)、「な」と「の」のどちらかが好んで用いられるが両方可能なもの(例:「正常」「巨額」)があり、語尾は「的」形容名詞と違って一定しない。また形容名詞の中には名詞としても用いられる語もある(例:「健康」「危険」)。また、「的」以外にも形容名詞を導く接尾辞があるが(例:「げ」(怪しげ);「がち」(忘れがち))それらの接尾辞の生産性は「的」に比べるとずっと低い。つまり、派生形容名詞(のみ)を作る接尾辞として「的」は生産性がひじょうに高く、この接尾辞の付いた語はすべて必ず形容名詞であり、単純形の形容名詞および「げ」「がち」などの接尾辞の付加された派生形容名詞の中で、最も安定した形の形容名詞といえると思われる。したがって、「的」形容名詞は語尾の「な」が無くても名詞の前に現れれば名詞を修飾する働きをしていることは明らかであるといえるかもしれない。しかし接尾辞が生産的で形も安定しているというだけでは、形容名詞(あるいは形容詞)の名詞への編入の条件にはなり得ない。例えば日本語には形容詞を導く接尾辞がいくつかあり(例:「しい」(痛ましい);「やすい」(歩きやすい);「っぽい」(忘れっぽい);「くさい」(人間くさい))、「やすい」は生産的な接尾辞で動詞に自由に付けることができると考えられるが、しかしこの接尾辞の付いた形容詞と名詞から成る複合語は許容できない。「分かりやすい本」に対して「*分かりやす本」などとは言えない。形容詞の場合、語の内部に現れるときには必ず語幹の形でなければならず、形の安定度という点では「的」形容名詞ほどではないといえるかもしれない。また、すでに指摘したように、派生形容名詞を導く接尾辞には「的」ほどに生産的な接尾辞は他に存在しない。

「的+名詞」形の複合語をS構造複合の結果とみなす分析について、疑問点を述べてきた。手短かに言えば以下のような疑問である。日本語で形容名詞の統語編入を仮定すると、確かに「的な+名詞」形の句と「的+名詞」形の語との間のほぼ完全な対応関係は説明できるかもしれない。しかし影山(1993)で示されている名詞の動名詞への編入(例:「洋書の購入」→「洋書購入」)、および名詞の単純形容名詞への編入(例:「日本語に固有」→「日本語固有」)など他のS構造複合とは違い、派生形容名詞(あるいは派生形容詞)の名詞への編入は「的」の付いた形容名詞だけがその適用を受けることになる。もしそれでよいというならば、「的」形容名詞が他の単純形の形容名詞や派生形容名詞とどのような点で違っているのか、「的」形容名詞には他の形容名詞には見られない特徴が何かあるのか、といったことを明らかに

する必要があるのではないかと思われる。

第1節で Spencer(2011)が, Chukchiにおける形容詞の名詞への編入(Spencer(1995))に言及して, このように完全に生産的な編入の操作によって導かれた「形容詞+名詞」形の複合語は名付けの機能とは無関係であるということを描していることに触れた。名付けの働きをもたないということは, 「的+名詞」形の複合語についてもそのまま当てはまることは明らかである。筆者はまだ Spencer(1995)の形容詞編入については十分に検討していないが, Spencer(2011: 503)は Chukchi などでは形容詞が2回連続して現れることが可能であるという事実を描している。「的+名詞」形の場合も, 例えば「理知的・西洋的 芸術作品」(「西洋的・理知的芸術作品」も可)のように「的」派生形容名詞の積み重ね(stacking)が可能であり, 編入の操作によるものであることがうかがえる。しかし「的+名詞」形を形容名詞の編入によるものとみなす場合, 「的」形容名詞の編入が編入の一般的な特徴に還元できるかどうかを考えなければならないと思われる。

5 まとめ

第2節で見たように, Booij(2010)は, 統語的な性質をもっているも一定の制約のある構造では, その構造と名付けの機能との間には密接な関係があると主張している。そのような構造のうちオランダ語の *rode kool* (赤キャベツ) などに対して Booij(2010)は $[A^0 N^0]N^0$ ないし $[A^0 N^0]N'$ の構造を提示しており, どちらの構造が正しいかに関しては結論を保留しているが, 本稿では英語および日本語との比較を容易にするために, 前者の「統語的複合語」の構造を前提とした上で, 英語と日本語でそれぞれこの構造をもつと考えられる表現について, Booij(2010)の上記の主張の妥当性を検討した。

第3節で, 英語において $[A^0 N^0]N^0$ の構造をもつと考えられる表現は意味はほぼ合成的であるが, 複合語内に現れる場合には(例: [small car] driver の small car), 形態的複合語と同様に名付けの機能をもつことというを描した。さらにこの構造が統語構造上に生起するときにも, いかなる統語規則も適用されず形容詞と名詞だけから構成されているときには名付けの機能をもち得るということを描した。第3節の(15)に挙げた expensive component と Norwegian component に対する defective component の例を思い出していたきたい。

日本語では, 形容詞と名詞から成る複合語で上記の統語的複合語の構造を

もつものはないと考えられるが、形容名詞に関しては第4節で、接尾辞「的」の付いた形容名詞と名詞から成る複合語（例：「急進的意見」）がこの構造をもつことを示した。さらにこの場合、対応する句（例：「急進的な意見」）と完全な対応関係にあり意味も完全に透明なので、もはやこの形の語は名付けとはみなし得ないということを指摘した¹²。したがって、 $[A^0 N^0]N^0$ の構造が常に名付けの機能と結びつくという Booij (2010) の提案は必ずしも正しいとはいえないと考えられる。

もっと一般的に言えば、一方では句でありながら語彙化されて名付けの機能をもつものもあり、他方では語でありながら句と同様に意味が完全に透明で、名付けの機能をもたないものも存在するということになる。

第1節で触れたように、Spencer (2011) で Chukchi 語などでは完全に生産的な形容詞の編入が適用されると指摘されている。(ただし、日本語の「的+名詞」形の語については、編入によるものと考えてよいかどうか、現在のところ筆者には明らかではない。) また、Schlücker and Hüning (2009a) でも、ドイツ語の「形容詞+名詞」形の複合語の中には完全に意味が合成的で、名付けではなくむしろ陳述の働きをするようなものがある、と述べている。

一般に名付けの働きをする複合語は多少なりとも意味が語彙化されていて合成性を欠くと考えがちであるが、しかし本稿では英語において、 $[A^0 N^0]N^0$ の構造をもつ表現は意味が合成的であるにもかかわらず、この構造をもつ複数の表現のうちの一部が実際に名付けの機能を果たすことが可能であるということ述べた。この主張が正しいければ、英語において帰属形容詞と名詞から構成される統語構造として、Sadler and Arnold (1994) で提案されている上記の構造（つまり Booij (2010) が「統語的複合語」と呼んだ構造）が妥当であるということを実証することにもなるだろう。

注

1. オランダ語もドイツ語同様複合語はあるが、数はずっと少ない。Hüning (2010) は、名付けのための表現としてオランダ語は (4) のような句の形、ドイツ語は複合語が優勢であるという違いを次のように説明している。オランダ語は歴史的に屈折が消失し、主要部名詞との一致を示す形容詞の語尾は、上に記したように一つの場合を除いて常にシュワの *-e* である。その意味で形が安定していて、名付けとして使うのに適している。反対にドイツ語の場合、句は屈折が複雑であり、屈折語尾の無い複合語の方が形が安定していて名付けとして使われやすい。
2. Anderson (1992) は (7) を「形態的緊密性」の原理とは言わず、語彙論的仮説 (Lexicalist

Hypothesis)と呼んでいる。Kageyama (2009)は、日本語の複合語には通常のWordレベルの複合語の他に、Kageyama (2001)で提案されたWord Plus (W⁺)レベルの複合語を仮定すべきことを主張し、それにとまってBooij (2010)と同じく、形態的緊密性の原理を上(7a)と(7b)の2つに分けるべきであると指摘している(詳しくは影山(2009)を参照)。また、Haspelmath (2002)は形態的緊密性の原理を二つの部分に分解するのではなく、下の(i)の定義を弱めて、(ii)のような定義に改めるべきであると提案している。(ii)は実質的には、Anderson (1992)の定義(7)と同じ内容とみなして差し支えないと思われる。

- (i) 統語規則は語の内部に適用することはできない。
- (ii) 語順と構成素に関する統語規則は語の内部に適用することができない。

(Haspelmath (2002: 162))

筆者はShimamura (2003, 2007)において、(4) (5)に類似した句の表現が非主要部に生起するオランダ語の複合語(cf. Booij (2002: 146))やKageyama (2001)で提案されたWord Plusレベルの複合語に注目して、Haspelmath (2002)にしたがって、形態的緊密性の原理を(ii)の形に弱める可能性を示唆した。なお、Haspelmath (2002)の第2版であるHaspelmath and Sims (2010)では、この原理を以下の(iii)のように定義していて、これはHaspelmath (2002)の(i)と同じものであり、弱める提案はしていない。

- (iii) 統語規則は語全体ないし語全体の諸特徴に言及/適用できるが、語の内部ないし語の内部の諸特徴に言及/適用することはできない。

(Haspelmath (2010: 203))

Di Sciullo and Williams (1987)もこの原理を主張しているが、(iv)はAnderson (1992)の(7) ((a)と(b)両方)やHaspelmath (2002)の(i)と実質的に同じものであり、Anderson (1992)のように2つの部分にわけて定義してはいない。

- (iv) 統語規則は語の内部に直接アクセスしない。

(Di Sciullo and Williams (1987: 45))

形態的緊密性の原理の上述のような様々な定式化に対して、Haspelmath (2011)は、語の形態的緊密性を支持するとしてこれまでに出示されたいかなる証拠によっても、語と句の間に明確な区別が存在するということは保証されないという立場を表明している。

3. Booij (2010: 178-179)はヨーロッパ圏の言語には統語的な性質をもちながら名付けの働きをする「形容詞+名詞」形の表現が広く見られると指摘して、オランダ語、ドイツ語、英語など8つの言語の例を挙げている。英語に関してはArabian horse, electrical outlet, modern art, natural childbirth, blue cheeseを挙げている(Booij (2010: 179))。この中でblue cheeseはおそらく純粋に形態的複合語であって[A N]_Nの構造を仮定すべきだと思われるが、関係の形容詞を含むArabian horseとelectrical outletに関しては、あるいは統語的複合語の[A⁰N⁰]_{N⁰}の構造を仮定する可能性はあるかもしれないが、本稿では一応[A N]_Nの構造をもつものと仮定する。
4. Carstairs-McCarthy (2010)には(15)と同類の例が他に2組示されている(p. 207)。
5. Shimamura (2001)では後者の「形容詞+名詞」形について、完全な語とも完全な句ともいえず、

両方の性質を合わせ持つような形であると述べた。

6. 筆者がShimamura (2001) を執筆した後 Richard Sproat 氏から Very Large Array Home Page という名前のホームページを、また Jack Hoeksema 氏からは Very Large Telescope と呼ばれる望遠鏡についてのサイトがいくつかあることを教えていただいた。

このことはShimamura (2003) に紹介しておいたが、どちらのサイトも、Large Array および Large Telescope の形容詞 large の前にさらにそれを修飾する very が付いているので、明らかに形態的緊密性の原理に違反したままの形で Very Large Array と Very Large Telescope が名付けの働きをしていることになる。どちらも「very + 形容詞 + 名詞」形がそのまま語彙化されたものと考えることができよう。

7. Booij (2009a: 98) ではさらに、形態的緊密性の原理の (7a) にさえ従わない事実がいくつかの言語で観察されるということが指摘され、(7a) は絶対的普遍性 (absolute universal) ではないが、この制約の違反は通言語的には例外的であると述べている。
8. 「的」の基体として「自動的な」「消極的な」「国際的な」の「自動」「消極」「国際」のようにそれ自体では独立できない語幹 (stem) のレベルのものもあるが、多くは語 (word) レベルで範疇は名詞 (動名詞も含む) である。語幹と語の区別に関しては影山 (1993: 16) 参照。「的」は時に和語や外来語に付くことがあるが (例: 「総花的」「リーダー的」)、原則的には漢語に付く接尾辞である。「的」はひじょうに生産的な接尾辞なので「よろず承り的」のように句にも拡張して付加されることがあり、また「私(わたくし)的」などという表現が使われたりするもの、「的」の生産性の高さを物語るものであろう。
9. (27) のそれぞれのペアの2つの表現は、森田 (2008: 189-191) でどちらか一方の形、つまり「な」の付いた形と付かない形のいずれか一方のみが示されているものである。森田 (2008) は同様の例を他にもたくさん挙げているが、「的」の付いた形容名詞の意味分類のために例示したのであって「な」の有無を問題にしているわけではない。
10. 蔡 (2007: 19) も指摘するように、「的な + 名詞」形と「的 + 名詞」形のどちらか一方の形で語彙化している場合がある。蔡は「知的財産権」「総合的な学習 (の時間)」を例示しているが、これらの2つはともに語彙化した表現としてレキシコンにそのままリストされると考えられる。
11. (30a) と (31a) は蔡 (2007: 19) に挙げられた例である。蔡 (2007) では「的な + 名詞」形と「的 + 名詞」形に関して、どのような条件のもとで前者が後者に交替可能かを計量的な調査に基づいて考察している。蔡 (2007) は交替可能ではない場合の項目をいくつか挙げていて、上記2つはそれらの項目の中にある事例である。蔡 (2007) は形態的緊密性の原理には触れていないが、明らかにこの原理にもとづいた説明が可能である。
12. 本稿では形容名詞が名詞を修飾する場合、単純形の形容名詞と派生形の形容名詞は扱ったが、複合形容名詞は取り上げなかった。複合形容名詞に関しては竝木 (1988) において、「～可能(な)」(例: 「利用可能(な)」) という形の生産性の高いパタンの複合形容詞についての詳細な検

討がなされており、この形の複合形容詞が主要部名詞を修飾する例もいくつか指摘されている。例えば「応援可能エリア」「手続可能期間」「授業可能日数」などである(pp. 67-68)。しかしこのような複合語が許容されない場合もかなりあると思われる(例:「?提出可能証明書」「?連絡可能電話番号」「?提出可能役所」「?使用可能楽器」「?使用可能テーブル」)。複合形容名詞を本稿で取り上げることができなかったのは、影山(1993)および影山(編)(2009)において、「関西人特有」「日本語独特」などは、そのような複合形容名詞自体が統語構造における複合によって導かれる複合語であるという分析が提示されているからである。本稿では、形容名詞自体は(複合形容名詞が統語的な複合語であるという分析が妥当なものだとしても)そのような可能性のない形容名詞のみを対象にして、そのような形容名詞と名詞から成る複合語がどのような構造をもつかを考察した。複合形容詞に関しては今後考えてみたい。

参考文献

- Anderson, Stephen R. (1992) *A-Morphous Morphology*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bauer, Laurie (2003) *Introducing Linguistic Morphology*, Second edition, Edinburgh University Press, Edinburgh.
- Bennett, Paul (2002) "English Adjective-Noun Compounds and Related Constructions," *GEMA Online Journal of Language Studies* 2 (1).
- Booij, Geert (2002) *The Morphology of Dutch*, Oxford University Press, Oxford.
- Booij, Geert (2009a) "Lexical Integrity as a Formal Universal: A Constructionist View," *Universals of Language Today*, ed. by Sergio Scalise, Elisabetta Hagni and Antonietta Bisetto, 83-100, Springer, Berlin.
- Booij, Geert (2009b) "Phrasal Names: A Constructionist Analysis," *Word Structure* 2, 219-240.
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*, Oxford University Press, Oxford.
- Botha, Rudolf (1984) *Morphological Mechanisms: Lexicalist Analyses of Synthetic Compounding*, Pergamon Press, Oxford.
- Bresnan, Joan and Sam A. Mchombo (1995) "The Lexical Integrity Principle: Evidence from Bantu," *Natural Language and Linguistic Theory* 13, 181-254.
- Carstairs-McCarthy, Andrew (2002) *An Introduction to English Morphology*, Edinburgh University Press, Edinburgh.
- Carstairs-McCarthy, Andrew (2010) *The Evolution of Morphology*, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Di Sciullo, Anna Maria and Edwin Williams (1987) *On the Definition of Word*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Downing, Pamela (1977) "On the Creation and Use of English Compound Nouns," *Language* 53, 810-842.
- Giegerich, Heinz J. (2005) "Associative Adjectives in English and the Lexicon-Syntax Interface," *Journal of*

- Linguistics* 41, 571-591.
- Giegerich, Heinz (2009) "Compounding and Lexicalism," *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, 178-200, Oxford University Press, Oxford.
- Gunkel, Lutz and Gisela Zifonun (2009) "Classifying Modifiers in Common Names," *Word Structure* 2, 205-218.
- 原由起子 (1986) 「一的 —— 中国語との比較から ——」『日本語学』5 卷 3 号, 73-80.
- Haspelmath, Martin (2002) *Understanding Morphology*, Arnold, London.
- Haspelmath, Martin (2011) "The Indeterminacy of Word Segmentation and the Nature of Morphology and Syntax," *Folia Linguistica* 45, 31-80.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims (2010) *Understanding Morphology*, Second edition, Hodder Education, London.
- Hüning, Matthias (2010) "Adjective + Noun Constructions between Syntax and Word Formation in Dutch and German," *Cognitive Perspectives on Word Formation*, ed. by Alexander Onysko and Sascha Michel, 195-215, De Gruyter Mouton, Berlin.
- Kageyama, Taro. (1982) "Word Formation in Japanese," *Lingua* 57, 215-258.
- Kageyama, Taro (2001) "Word Plus: The Intersection of Words and Phrases," *Issues in Japanese Phonology and Morphology*, ed. by Jeroen van de Weijer and Tetsuo Nishihara, 245-276, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Kageyama, Taro (2009) "Isolate: Japanese," *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, 512-526, Oxford University Press, Oxford.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房, 春日部市.
- 影山太郎 (編) (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店, 東京.
- Lieberman, Mark and Richard Sproat (1992) "The Stress and Structure of Modified Noun Phrases in English," *Lexical Matters*, ed. by Ivan Sag and Anna Szabolcsi, 131-181, CSLI, Stanford.
- Lieber, Rochelle (1992) *Deconstructing Morphology: Word Formation in Syntactic Theory*, University of Chicago Press, Chicago.
- Masini, Francesca (2009) "Phrasal Lexemes, Compounds and Phrases: A Constructionist Perspective," *Word Structure* 2, 254-271.
- 森田良行 (2008) 『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版, 東京.
- 竝木崇康 (1988) 「『可能』という語で終わる日本語の複合語——接尾辞 -able で終わる英語の派生語との対照——」『茨城大学教育学部紀要』37 号, 53-75, 茨城大学教育学部.
- Olsen, Susan (2000) "Composition," *Morphology: An International Handbook on Inflection and Word-Formation*, ed. by Geert Booij, Christian Lehmann and Joachim Mugdan, 897-916, Walter de Gruyter, Berlin.
- Roeper, Thomas (1988) "Compound Syntax and Head Movement," *Yearbook of Morphology 1988*, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, 187-228, Foris, Dordrecht.
- Roeper, Thomas and Muffy E. A. Siegel (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds,"

- Linguistic Inquiry* 9, 199-260.
- Sadler, Louisa and Douglas J. Arnold (1994) "Prenominal Adjectives and the Phrasal/Lexical Distinction," *Journal of Linguistics* 30, 187-226.
- Schlücker, Barbara and Matthias Hüning (2009a) "Compounds and Phrases. A Functional Comparison between German A + N Compounds and Corresponding Phrases," *Rivista di Linguistica* 21, 209-234.
- Schlücker, Barbara and Matthias Hüning (2009b) "Introduction," *Word Structure* 2, 149-154.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Shimamura, Reiko (2001) "The A-N Expression within the Compound and the Phrase/Word Distinction," *Grant-in-Aid for COE Research Report (5) Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*, 163-175, Kanda University of International Studies.
- Shimamura, Reiko (2003) "The Boundary between Word and Phrase: The Case of A-N Expressions within Compounds," *Proceedings of CIL 17*, CD-ROM, ed. by E. Hajičová, A. Kotěšovcová and J. Mířlovský, Matfyzpress, Prague.
- Shimamura, Reiko (2007) "The Adjective-Noun Expression within the Word Revisited: The Boundary between Phrase and Word," *Language Beyond: A Festschrift for Hiroshi Yonekura on the Occasion of His 65th Birthday*, ed. by Mayumi Sawada, Larry Walker and Shizuya Tara, 367-395, Eichosha, Tokyo.
- 島村礼子 (2000) 「『語』としての英語の属格複合名詞について」『平成 11 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告 (4) 先端的语言理論の構築とその多角的な実証 (4-A)』, 341-361, 神田外語大学.
- Spencer, Andrew (1995) "Incorporation in Chukchi," *Language* 71, 439-489.
- Spencer, Andrew (2011) "What's in a Compound?," (Review Article: *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, Oxford, Oxford University Press, 2009,) *Journal of Linguistics* 47, 481-507.
- Sproat, Richard (1993) "Morphological Non-separation Revisited," (Review Article: *Deconstructing Morphology*, by Rochelle Lieber, University of Chicago Press, Chicago 1992,) *Yearbook of Morphology* 1992, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, 235-258, Kluwer, Dordrecht.
- 高橋勝忠 (2009) 『派生形態論』英宝社, 東京.
- 蔡珮菁 (2007) 「連語と交替可能な臨時的複合語の語構成—新聞社における『A 的な B』と『A 的 B』の場合—」『日本語の研究』第 3 卷 3 号, 17-31.
- 蔡珮菁 (2009) 「臨時的な複合名詞を作る 2 字漢語形容動詞について」『阪大日本語研究』21, 43-60, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

[辞書]

『広辞苑』第 6 版 (2008) 岩波書店, 東京.